

宝塚すみれ発電 (市民発電所)

兵庫県宝塚市



1 牛乳ブランドを再生する消費者の挑戦

一晩置くと、表面にとろっとしたクリーム層ができる、栄養豊富で香りの高い牛乳が兵庫県丹波市の山間地で作られています。1985年から作られている「氷上低温殺菌牛乳」です。数秒で高温殺菌される一般的な牛乳と比べ、じっくりと30分間かけて65°Cの低温で殺菌されるため、搾りたての生乳に近い風味が味わえます。

県内の消費者に親しまれてきたこの牛乳は、現在は「丹波乳業」株式会社のブランドとして販売されていますが、3年前までは地元の兵庫丹但酪農農業協同組合によって作られてきたものでした。2014年、兵庫県内の協同組合が一組織になるのに伴い、牛乳の製造プラントを手放す決定をし、一度は存続の危機にさらされていました。

「私たちが大事に飲み、守り続けてきた牛乳を未来の子どもたちにも飲ませてあげたい」

誰もがあきらめかけていた時、こう声を上げたのは、長年、牛乳を飲み続けてきた消費者たちでした。県内の消費者グループ10団体が声をかけあい、2015年に一般社団法人「みんなの低温殺菌牛乳協会」を設立しました。その活動の一つとして、再生可能エネルギーで牛乳を応援するプロジェクトが誕生。ソーラーパネルで得た安価な電力を施設内で使うことによって丹波乳業の電気代を低く抑え、広く牛乳のファンを増やしながら経営を支えようという画期的な活動が始まりました。



脂肪球を崩さない「ノンホモジナイズ」製法のため表面にクリームができる

2 中古パネルの活用で牛乳ブランド継続

「発電はただの手段です。事業の目的は、農業を守ることです」と笑顔で話すのは、兵庫県宝塚市に住む井上保子さんです。同社団法人の理事であり、太陽光発電などの再生可能エネルギー事業を運営する株式会社「宝塚すみれ発電」の代表取締役です。

同社は太陽光発電と農業支援を同時に行うソーラーシェアリング事業を展開している発電所で、前身となる「新エネルギーをすすめる宝塚の会」の2012年の設立以来、市民の出資などを得て6か所で発電設備を設置・運営しています。事業の目的は収入よりも、毎日の食卓につながっているのが特徴です。

「10年以上使われていた中古品を再利用しています」と井上さんが指差すのは、丹波乳業の冷蔵庫施設の屋上に並ぶソーラーパネルです。牛乳プラントを引き継いだ会社が経営安定策を図っていたところ、井上さんの耳に入ってきたのが、中古のパネルの再利用でした。もとは大阪府内の工場で使われていたものでしたが、工場移転のために取り外され、新たな利用者を求めています。パネルを再利用すれば、運営コストを削減できるのではないか。丹波乳業が当時支払っていた電気代は、年間約2,000万円。100万円ほどでも削減できればと思った井上さんは、パネ



冷蔵庫施設(右)に設置された「宝塚すみれ発電第5号機」のソーラーパネル

ルを無償で譲り受けました。

問題は設置費用。たとえ発電設備が無償でも、設置費用は300万円もかかる見込みでした。そこで井上さんはみんなの低温殺菌牛乳協会から、ネット上で資金を募るクラウドファンディングへの挑戦を持ちかけました。「ソーラー発電でみんなの氷上低温殺菌牛乳の未来を創ろう!」と呼びかけると、2か月の間に見事に目標額(100万円)を上回る約126万円が集まりました。

こうしてできあがったのが、施設内で発電・使用を完結させる自家消費システムです。宝塚すみれ発電が関西電力より安い価格で丹波乳業に電力を供給し、その差額が直接同社への支援になる仕組みです。中古のソーラーパネルのため、全国で活用されているFIT(固定価格買取制度)には対応せず補助もありませんが、「特定供給」という方法によってエネルギーの「地産地消」が完成しました。

3 三者で役割分担する協働プロジェクト

「冷蔵庫の遮熱効果もあって、予想以上やったね」と井上さん。設置後の成果は予想を上回り、8か月で250万円ほどの節電効果が得られました。

このプロジェクトで注目すべきは、法人同士の役割分担です。発電事業をするには20年間施設を持ち続けなければならない、「誰かがやってくれる」という無責任さは許されません」と井上さん。そこで、責任の伴う発電事業とメンテナンスを宝塚すみれ発電が担当し、発電設備の設置費の一部の調達や牛乳のファン集めをみんなの低温殺菌牛乳協会が呼びかけます。その後押しを受けて製造する丹波乳業という三者の連携によって、長年愛されてきた牛乳ブランドが未来に引き継がれました。

「一つの会社で事業をするよりも、目的に応じて別の会社を作ったほうが動きやすいです。その時に重要なのは、プロジェクトが何を目標しているか、ゴールはどこかを意識することです。そしてブレずに進んできたからこそなっていました」と井上さん。



30年以上パッケージも変わらない「氷上低温殺菌牛乳」(右)と「みんなの低温殺菌牛乳協会」のパンフレット(左)

4 生産者を守るための発電事業

「事業化は、最後まで面倒を見る覚悟があるかどうかの問題です」と、責任や覚悟という言葉を繰り返す井上さん。脳裏に焼き付いているのは、22年前のある光景です。それは井上さんが味わった阪神淡路大震災のことです。「大事にしていたものが一瞬にして目の前で崩れていきました」。

井上さんの住んでいた借家は全壊判定を受けて取壊しになり、被災のショックから立ち直れませんでした。ようやく前向きになれたのは2か月ほど経った時のこと。牛乳を共同購入してきた友人たちと顔を合わせてからでした。

「震災のつらさで自らの命を絶った人もいます。まだ復帰できていない人もいます。そんな心境から復帰したら、失うものは何もありません。そこで覚悟が生まれました」

辛い過去を前に進む力に変えて、宝塚すみれ発電の事業は生み出されているようです。

「偉い人に任せておけば、どうかしてくれるという世の中は終わったんやろうね。お金だって何かあったらしよせん紙くずにしかなりません。大切なのは食べ物を作り続ける生産者です。それを守るツールとして再生エネルギー事業を続けていきたいです」



井上保子さん